

5. やさしい育成技術

馬の歯のハナシ

財団法人 軽種馬育成調教センター 調査役 原 秀昭

歯の本来の働きは食べ物をくわえて噛み砕くことです。また、馬の歯は武器にもなります。人は、「馬は蹴る」とは思っていますが、「噛み付く」と思っている人はあまりいません。馬にとって歯は武器のひとつであることを頭に入れておきましょう。噛まれて鼻や指をちぎられそうになった事件を見聞きします。

さらに、歯を見ることによってその馬の年齢を推定することもできます。そして上顎切歯の摩滅状態によっては齧癖馬であることも見抜けます。

人の寿命が昔と比べてどんどん延びている要因のひとつに歯を手入れする技術の進歩が挙げられています。自然界の野生動物では、歯が弱る＝獲物を捕れない・採食できないは、死を意味します。歯を磨き、虫歯を治療し、入れ歯を使う現代人の寿命が延びるのは当然だと思います。

馬も健康に長生きさせるためには歯の健康管理が必要なことは言うまでもありません。今回は歯についてお話しします。

歯の種類と数

馬の歯は図1のように切歯(I又はJ)、犬歯(C)、前臼歯(P)と後臼歯(M)に分けられます。後臼歯以外は二代性歯(始めに乳歯が出て、一定時期を経て永久歯と入れ替わる歯のこと)です。つまり、後臼歯は始めから永久歯が出てきます。これら4種の歯の数を表す、歯式というものがあります。哺乳類の歯数の基本構成は上顎も下顎もともに、 $I_1 I_2 I_3 C P_1 P_2 P_3 P_4 M_1 M_2 M_3$ であり、歯式で表すと $I \frac{3}{3} C \frac{1}{1} P \frac{4}{4} M \frac{3}{3}$ となります。分子は上顎を示し、分母は下顎を示します。歯は左右対称に生えますから歯式は片側で示されます。馬では前臼歯のうち P_1 がなく、前臼歯は3本です。

牝は $I \frac{3}{3} C \frac{1}{1} P \frac{3}{3} M \frac{3}{3}$ となり、牝にはさらに犬歯がないので、 $I \frac{3}{3} C \frac{0}{0} P \frac{3}{3} M \frac{3}{3}$ となり、馬の歯の総数は、牝

40本、牝36本となります。

しかし、牝馬でも時には小さな犬歯が生えることがあります。

また、馬では生後6ヵ月頃、図1-1と1-2に示す上顎の前臼歯 P_2 の直前に痕跡的な小さな歯がしばしば出現することがあります。これを狼歯と言いますが、厩舎用語では「ヤセバ」とも言います。本来の P_1 にあたります。

3本の切歯は内側から順に鉗歯(I_1)、中間歯(I_2)、隅歯(I_3)とも呼ばれます。

ちなみに人の歯式は $I \frac{2}{2} C \frac{1}{1} P \frac{2}{2} M \frac{3}{3}$ で、総数は32本です。もちろん、男女平等です。

馬の歯列

側面

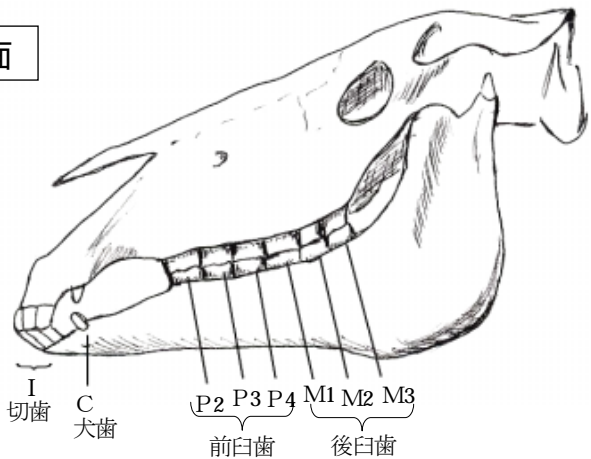


図 1 - 1

上顎

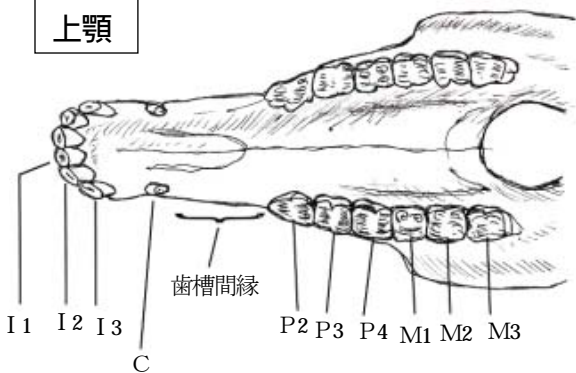


図 1 - 2

下顎

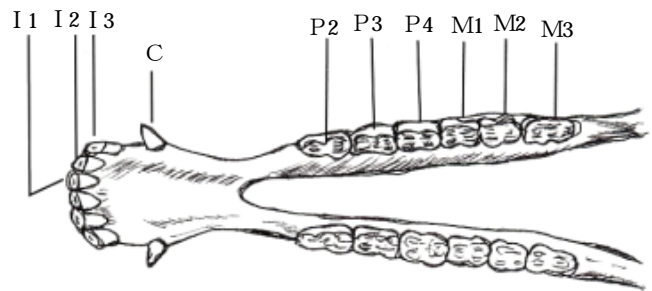


図 1 - 3

歯の構成

馬や反芻類では下顎歯列（下顎の歯並び）は上顎歯列（上顎の歯並び）よりも内側にあるので不等顎型とい
い、対応する上下の歯は前後の関係ではほぼ合致しますが、完全に噛み合ってはいません。咀嚼運動は主として水平運動で飼料をすり碎きますので、成長を続ける馬の臼歯は図2のように斜歯（後述）になりやすい構造
なのです。

歯槽間縁しそうかんえん（図1-2）、これは皆さんご存知のとおり、歯の名称ではありません。犬歯と前臼歯の間の部分で、
はみが収まる空間です。人が馬に乗るためにこれを神様が創ったのか、人が賢かったのかわかりませんが、この
歯槽間縁のおかげで馬を御しやすくなりました。また、こんな話もあります。馬をよく知らない人が口の中を
見て言いました。「馬に生まれてこなくてよかった。歯が抜けて、なくなっても働かされる。」と。

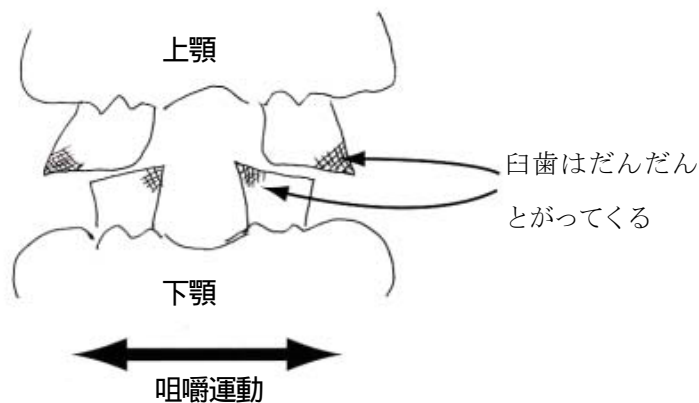


図 2 臼歯の構成と動き

歯の脱換時期

馬の乳歯や永久歯の発生時期はその馬の種類、発育状態そして栄養状態などによって若干のずれがありますし、成書によっても少し違います。

家畜外科学(金原出版株式会社)に掲載されている数値(主に Sisson による)を参考にすると次のとおりです。

	乳歯の発生	永久歯の発生
I ₁	出生時～生後1週間	2年半
I ₂	4～6週	3年半
I ₃	6～9ヵ月	4年半
C	出生時～生後2週	4～5年
P ₂	同上	2年半
P ₃	同上	3年
P ₄	同上	4年
M ₁	—	9～12ヵ月
M ₂	—	2年
M ₃	—	3年半～4年

歯の病気と管理

斜歯と整歯

前述しましたように、馬は斜歯になりやすい構造です。毎日の咀嚼運動によって歯は成長とともに摩滅していき、上顎の臼歯は外側が鋭利に、下顎の臼歯は内側が鋭利になっていきます(図2)。この状態を斜歯と言います。この尖った部分が頬の内側や舌の粘膜を傷つけ、口内炎などを起し、ひどい場合は潰瘍や膿瘍を発症します。もちろん、噛み合わせにも支障が出てきます。その症状は食べる速度が遅くなったり、口から食べ物をポロポロこぼしたり、食べている時に頭を傾けたり、多量の唾液を流したり、重度になると異常な口臭を発します。

食欲があるのに満足に食べられない状態に陥り、発育期の馬体やせっかく調整した体調に悪影響を与えます。年に2、3度くらいは獣医師の検査を受けましょう。斜歯の治療は歯鑿(馬用のヤスリ)を使い、尖った部分を削り、噛み合わせを整えます。これを整歯と呼んでいます。

歯代わり・狼歯と抜歯

乳歯は下から生えてくる永久歯によって押し上げられ自然に脱落します。乳歯が折れて歯肉(歯茎)の中に残ったり、なかなか脱落せずに歯肉や口内を傷つけたり、永久歯の成長を阻害しそうな場合には抜歯鉗子で抜歯します。生後2年半から5年間は歯代わり時期でもあり、そして競走馬としても重要な時期でもありますので、日常の健康管理において口腔内の検査は大切です。

また、時々狼歯が大きくなったり、生える位置や向きによっては、銜受けに支障をきたす場合もあります。このような場合も抜歯します。

その他

そのほか、歯の病気には歯肉炎、齲齒(虫歯)、齒槽骨膜炎、齒癭などがあります。歯牙疾患の一般的な徴候は斜歯の項で記述した症状と同じようなものなので、異常を感じたら獣医師に診てもらいましょう。

口腔内の検査方法

歯に異常のある馬は口中に食塊が残っています。まず、口の中をよく洗います。その方法は大きなスポイト(マヨネーズなどのプラスチック容器でも可)に水を入れ、それを口角のところから歯と頬の間に挿し入れて臼歯の方に向けて洗い流します。なかにはホースを突っ込まれても平気な馬もいますが。そして開口器があれば装着します(図3)。開口器を使用すれば人馬とも安全に詳しく口の中を観察することができます。馬において特に第3前臼歯および第1後臼歯(図1-1、1-2のP₄とM₁)は解剖的・生理的に歯牙疾患を多発しやすい歯とされていますので注意深く検査してください。

開口器がない場合は、ベテランの馬取扱者ならばご存知の、以下の方法です。

齒槽間縁から指を舌の上に差し入れ、それから親指を舌の下に入れて舌をつかみながら上に折るようにして、親指が口蓋(上顎の天井部分)に触れるようにします(図4、5)。こうすればほとんどの馬は口を開けるので、観察することができます。普通の馬ならば、鼻捻子(俗に言うハナネジ)などの保定道具を使用せずに検査できると思います。もちろん、舌を放さない限り、手は噛まれません。

前肢と頭の動きには十分注意し、人馬共に事故のないようにしましょう。



図3 開口器のいろいろ

右と中のふたつは口の片側に装着して使う



図4 舌をつかむ



図5 口蓋に触れて口を開けさせる